中央には地下の埋葬室へと通じる大きな竪坑が口を開けていた。石棺が置かれた部屋は、この竪坑を地下に一五メートルほど垂直に降りた、最も深い場所にあたる。部屋の入口は、ツタンカーメン王墓と同様に封鎖されていた。封鎖壁の記録をとり、少し開けて中を覗いた時の興奮は今も鮮明に覚えている。

アラーへの祈りが終わり、ジャッキで少しずつ石棺の蓋が持ち上げられる。徐々に石棺内に光が差し込み、中の様子が見えてきた。結果は期待に反し、石棺内は既に盗掘を受けて砂漠の砂が入り込んでいた。テレビカメラマンや現地の役人は落胆した表情を浮かべていたが、未盗掘でなくとも我々調査隊にとってはすばらしい発見である。遺物に記された文字資料によると、石棺に埋葬された人物はラメセス二世時代の高官メスであり、彼は王の書記を務めていたようだ。石棺は未完成であり、その足面には女神像が急場で描かれている。これにより、古代エジプト人にとって石棺の装飾で最も重要な要素がこの女神像であったことが窺える。また石棺の周辺らは、アラバスター製の良質な壺、ファイアンスや貴石で作られた装飾品などが出土したが、これらの遺物は、当時、高官クラスの人物がどのような副葬品を伴って埋葬されるのかといった、当時の社会を知りうる貴重な資料なのだ。

ダハシュール北遺跡の調査は、華々しい石棺の発見に沸いたが、考古学として重要なことは成果を報告書として開示することである。報告書の作製には、遺物・遺構の図面化、類例検索、そして資料の分析・考察がある。これは、発掘後に訪れるもう一つの楽しみである。なぜなら、過去に遺されたモノは何も語らない。その無口なモノに様々な角度から語りかけ、当時の生活・文化・社会を復原していくことが考古学であり、そこに面白さがあるからだ。

考古学は「宝探し」的な興奮と学問としての知的興奮の両者を味わうことのできる学問です。学生の皆さん、先ずはフィールドに出て発掘調査の醍醐味を体感してみてください。

〈第二回〉

野帖を読む

鶴見太郎

「野帖」とは、ここでは調査者が調査地へ赴く際、記録用に携行するノートのことを意味する。

報告者にとって「野帖」とかかわるきっかけとなったのは、かつて卒論の準備をしていた頃、成城大学の民俗学研究所にある柳田文庫を訪れ、「全国山村生活調査」、ならびに「海村調査」の「採集手帖」を閲覧した時のことだった。

一九三四年、柳田国男は傘下の弟子たちを中心に、組織的な全国規模での民俗調査へと乗り出した。弟子たちはあらかじめ、「仕合せのよい人又は家の話があるなら承りたし」や、「土地の人で古く神に祀られてゐる人がありますか」など、柳田が設定

した一〇〇項目の質問を印刷した「採集手帖」を携帯して、前近代の生活伝承を色濃く残していると柳田が想定する僻村へ赴き、数週間滞在して調査に日を送った。

彼らがその時残した「野帖」は、研究史上前近代における民間生活の有り様を伝える貴重な記録とされる。卒論の素材を見つけるべく、柳田文庫に入った報告者もまた、それに魅せられた一人だった。

何冊かを味読するうちに、同じ「採集手帖」でありながら、記録として見た場合、完成度にかなりの違いがあることが分かった。民俗学がいまだ一個の学問領域として認知されていなかった当時、柳田の弟子たちのうち、職業的な学者といえる人物は皆無といってよく、文字通りアマチュアの集団だった。調査地に行く弟子たちに柳田は、聞き取り調査を主軸とすることを通達しており、経験を積んでいない若手研究者にとって現地での調査は思いのほか困難が付きまとった。その結果、「採集手帖」の数冊は、止むを得ず幾つかの質問項目を空欄にするという事態が生まれることとなった。

その一方、すべての質問項目が埋まっていることは勿論、周辺事情まで細かに聞き取り調査を行い、ほとんど余白がないまでに綿密な「採集手帖」があった。そして報職人芸的な域にまで達したこれらの記録を残した人物の経歴を是非とも知りたくなった。そして橋浦泰雄、大間知篤三、比嘉春潮といった、かつての「持ち主」がいずれも大正・昭和期にかけて社会主義者として活動したという事実に接し、自分なりに卒論に向けての「見取り図」を得たように思った。

歴史の推移を法則的に捉えようとするいささか観念的に過ぎる思想に身をおいた群像の一部が、戦時下にあって逼塞を強いられる中で、柳田民俗学に触れたことで、実際の農村を歩く機会を持った彼らの意気込みが、そのまま「採集手帖」における周到な調査記録としてあらわれたのではないか、という大きな枠組みが出来上がっていくように思えた。

さらに自分の中で同じ「採集手帖」を素材としながら、当初の方法意識が次第に動いて行くのが分かった。元々「柳田文庫」を訪れた目的は、あくまで前近代の生活事象を知ためだっが、これら新しい事実に直面するに当たって、「採集手帖」は、そのかつての「持ち主」の思想を知るための資料という新しい意味を持つに到った。

厳密な資料読解という観点からすれば、これは明らかに逸脱といってよい。しかし、この資料をこうした視点で読んでいるのは、この瞬間、自分だけなのではないか、という史学を志す者ならば、誰しもが通る喜びが、正にその時、訪れたといえよう。

「モンゴル」史と私

橘　誠

モンゴル史を研究していると、「なぜモンゴルなのか」とよく尋ねられますが、私がモンゴル史研究にたどり着いたのはかなり偶然的要素が強いと言えます。私は大学